



TITLE:

天文用語に関する私見と主張(3)

AUTHOR(S):

山本

CITATION:

山本. 天文用語に関する私見と主張(3). 天界 1934, 14(161): 406-411

ISSUE DATE:

1934-08-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166878>

RIGHT:

天文用語に關する私見と主張 (3)

(山 本 生)

星の名と、星座の名について(續)

我が國の一部に用ゐられてゐる天文譯名について、是正したいと思ふものも多い。たとへば、其の一例は *Bootes* といふ星座の譯語である。世に之れを「牛飼」と譯してゐる人がある。しかし、之れは誤譯であり、又、拙譯である。元來、*Bootes* は「大熊」星座の西南に隣りしてゐて、日週運行と共に「大熊」を追跡して行くやうな形に想像される星座であつて、ギリシャ文化の最初の時代に出來たホメロスの長詩 *Odyssey* に歌はれてゐるから、恐らく3000年の歴史を持つものであるが、ギリシャ時代の本統の名は *Βωωτης* である。しかし此の星座は、今日其の首星の名として一般に用ゐられてゐる *Arcturus* の原語 *'Αρχτούρος* (又は *'Αρχτοφύλαξ*) と混用せられ、場合により、又、人によつて、*Βωωτης* と *'Αρχτούρος* と、何れが星座の名で、何れが首星の名か?、判然しないことも應々あるのであるが、とにかく、意味は、隣りの星座との關係もあつて、*Bear-watcher* 或は *Bear-guard*、即ち「熊を見守る」、*熊の番人*、「牧場守り」(英語で *Herdsmen*、佛語で *Bouvier*)、*牧者*といふやうな意味に解釋せられ、従つて第十七世紀にヘズリウスが此の星座と「大熊」星座との中間に *αμορφωτοι* としてトレミイ以來忘れられてゐた星々を連ねて一新星座を創設した時にも、*Canes Venatici* 即ち「獵犬」といふ名を之れに與にへて、*Bootes* と「大熊」と、二つの大星座の意味を益々興味づけたのである。従つて、*Bootes* は何と言つても、すなほに「牧夫」と譯すべき筋合ひのものである。——尤も、*Bootes* の原語 *Βωωτης* が *Βους* (牡牛)と *ωθειν* (追ふ)とを組み合はせたものであると解釋して、之れを「牛を追ふ者」即ち「牛飼ひ」といふ風に意味付ける輩も無いではないが、そもそも *Βωωτης* を *Βους* + *ωθειν* と解するには非常に無理があり、單に之れは言語を弄ぶ者と嘲はれるに過ぎないばかりでなく、天空の實景を觀察して、「大熊」といふ重要な星座との最も自然的な機縁を無視するものである。

「熊」が御隣りにゐる事實を無視して、牛も居ないのに「牛飼ひ」を置かんとする不自然に氣が付かないとは、どうしたことか？

尙ほ、それだけでない。第三の理由として吾輩が「牛飼ひ」を排し、「牧夫」を採用しなければならない點は、之れが、前にも一應解説した意味に於いて、日本語としての一俗語に関する立場を考へなければならないからである。世にひろく知られてゐる通り、二千年以前から東洋には「七夕」の傳説がある。この説話中のヒーローはかの Altair 星によつて象徴される牽牛、即ち俗に言ふ「牛飼ひ」である。そして此の説話は、決して、單に古昔の傳説として一般民衆の腦裏から消え去つたものではなく、むしろ其の反對に、最近年は、此の可憐なる星物語りを、夏の夕べの楽しい行事として、一時の衰へから復興し、老若男女の區別なく、楽しもうとする傾向さへ明らかに見えてゐるのである。こうした時代に、民衆の持つ傳説と全く無關係な天空の一角から、まぎらはしくも今一つの「牛飼ひ」を齎し來り、人々を迷はせるといふやり方は、識者の深く謹むべき點であると思ふ。況んや、今から20年も前には、我が國の學界も俗界も皆一致して、Bootes を一應「牧夫」といふ譯語に統一したことがあつたのだから！！

Taurus を「牡牛」、Aries を「牡羊」と譯してゐる人がある。何れも一應尤もだと言へないわけではない。しかし、前にも記した通り、我が日本語では、元來、性の區別を超越した「牛」、「羊」といふ語が始めからあるのであつて、只、わざわざ牝牛や牝羊に對應し、其等と區別する必要がある場合にのみ、「牝牛」「牝羊」といふ風な復成語を用ゐる文法上の慣はしである。しかし、西洋では、英の Bull、獨の Stier、佛の Taureau、伊の Tora 等は皆ラテンの Taurus と同様に、始めから一字で、性をも表はす語となつて了つて居て、日本語のやうに兩性に通ずる語は存在しないといふ事情にある。Aries の場合も同様である。丁度之れは、日本に「兄」とか「弟」とか言つて、年齢の大小を加味した「兄弟」の語があるけれど、年齢の如何を問はず單に同胞だといふ意味の語が無い。しかるに、西洋語、例へば英語では、年齢の區別を超越した Brother 又は Sister といふ語があるのみである。故に、わざわざ「兄」を正確に

英譯する場合には Elder brother, ㇿ弟^ㇿならば Younger brother と言はなければならない。しかし、Brother を和譯する場合に、必ずしも兄とか弟とかいふ風に年齢の上下を區別することは要らない事があるのだけれど、日本語では一字で簡単に同胞といふ事を表はす語が無いものだから、止むを得ず、必要も無いのにㇿ兄^ㇿとかㇿ弟^ㇿとか、ハッキリ言ひ切ることを餘儀なくせしめられる。Bull や Taurus を和譯する場合は之れとよく似た場合である。前にも記した如く、天空に、特にㇿ牝牛^ㇿといふ星座があるのならば、Taurus を譯する場合に、是非ㇿ牝牛^ㇿとするのが正しいこと言ふまでもない。しかし、さうでも無くて、ひろい天空にㇿ牛^ㇿの星座が只一つしか無い場合に、なにもわざわざ語を複雑化して、牝牡の區別を付する必要は無いのである。尚ほ、ㇿ牛^ㇿとㇿ羊^ㇿとは、字に書いた形が時々よく相似て、紛らほしいことさへあるのであるが、之れを、ㇿ牡牛^ㇿやㇿ牡羊^ㇿと書くとなると、此の二語の相似は益々甚だしくて、混雜し易く、誤られる場合が多い。殊にㇿ牛^ㇿとㇿ羊^ㇿとは、共に黄道星座で、互ひに相ひ隣つてゐるため、事件も相似たことが起る場合が多いのだから。

天空に同じ名の星座が二つあつて、其の位置の南北により之れを區別してゐる例が、三つ四つある。例へばと、Corona Borealis と Corona Australis, Pisces と Piscis Austrinus, Triangulum と Triangulum Australe 等であるが、此等を日本語に譯する場合に、ㇿ北の冠^ㇿ、ㇿ南の冠^ㇿ、ㇿ南の魚^ㇿなどと書く人があるやうだが、之れは日本語といふものの文法を知らない事から起る誤りである。こうした場合にはㇿの^ㇿを用ゐないのが日本語なのであつて、現に、例へば、ㇿ北多摩郡^ㇿㇿ南多摩郡^ㇿと普通に呼ぶけれど、決してㇿ北の多摩郡^ㇿㇿ南の多摩郡^ㇿなどと呼ばない。従つて、星座の場合にも、ㇿ北冠^ㇿ(きたかんむり)、ㇿ南うを^ㇿといふ風に呼べば好いのである。英語でいふ Southern Cross の星座を、我が通俗界でもㇿみなみ十字架^ㇿといふ風に呼んでゐるではないか！

ついでに、Crux といふ星座を、單にㇿ十字^ㇿと譯する人もあるが、之れは

此のCrux といふ原語を思ひ付いた人と其の環境を全く無視した態度と言はなければならない。歐米人は直接間接に永く養はれて来たキリスト教の深い感化の中におゐる人々である。従つて彼等が南天の一角に見事な星々の畫くあの神祕的な形を見て、あれがキリスト教の象徴の「十字架」だと、特種な感激を以つて仰ぐといふのは、誠に當然なことである。従つて、Crux を單に幾何學的な「十字形」といふだけではなく、もつと宗教的な連想を誘ふ「十字架」と譯した方が適當なのである。——譯語といふものは、決して單に機械的であつてはならない。必ず其の原語の深い意味と、其の發案者の心境と環境と、其の他あらゆる事柄、尚ほ其れに、言語其のものの常識的や學的な本質と諸性質とを考慮のうちに置いて、尚ほ將來の社會文化上に於ける譯語の地位と其の見透しを考へつゝ、決定しなければならない。

Equuleus は小さい馬である。之れを「駒」と譯する人があるのは、「こま」即ち小馬であるのだから、一應は首肯するに足る。しかし、よく考へて見ると、この「駒」といふ譯名を幾百年も昔し、我等の祖先から受け継いだのならば、もはや何と言ふ資格も權利も無い。けれど、實は左様でなく、現代の日本人が「小さい馬」といふ意味の語を日本語の中に求めやうといふのである。今日の吾々の vocabulary 中の「駒」は、決して「小さい馬」だけを意味するのでなく、いろゝゝ永い國語史上の慣はしによつて、「駒」は敢へて小さからざる普通の寸法の堂々たる馬をも立派に意味する文學用語であるし、尚ほ又、一般社會に於いて、特に何の註釋も加へずに只「駒」と言へば、將棋の駒だとすぐに解釋する人の方が遙かに多い現代である。して見ると、Equuleus は寧ろ卒直に「小馬」(こま)と譯して置くのが無難であり、自然である。

Indus といふ星座を、吾人も永く「インド人」と譯してゐた。しかし之れは可なり不注意な誤譯であることを、最近に筆者は村上理學士から指摘された。Indus は、今から四百年前の米大陸發見者たちが、あの新大陸に於いて始めて御目にかゝつた新人種、即ち American Indian なのであつて、勿論、アジアの英領印度に住んでゐてかの Gandhi 氏にリードされてゐるインド人(又

はヒンドウ人)でないのである。故に、村上氏と共に、吾々は今後此の Indus を「インデヤン」と改めて置きたい。

毎年春の天に見える **Hydra** といふ星座がある。これを獨逸語で Was-serchlang 即ち「海蛇」又は水蛇などと譯するのは宜しくない。此の原語や意味は、ギリシャ神話にあるアルゴ船の遠征物語り中にある怪獸を意味してゐるのであつて、決して單なる動物の一種を表はしてゐるのではない。故に、むしろ、神話的な連想を保持するための立て前から、佛語や英語の譯名に習つて、只「ヒドラ」として置くのが最も穩當であると思はれる。尤も、「ヒドラ」といふ言語の中に、今日の動物學者が取り扱つてゐる水生の虫類を意味するものでないことを、特に注意して置かなければならないが。

Sculptor は「彫刻室」或は彫刻家の工作室の意味であるが、こうした藝術家の作業室を、近年我國では、フランス語を其のまゝ「アトリエ」と一般に呼ぶやうになつてゐる。だから今の吾々の場合にも、彫刻室などゴチない言葉を用ゐないで、「アトリエ」といふ新日本語を其のまゝ採用して置くのが良いと思はれる。

Pictor 即ち「畫架」を「えかけ」とあること、Microscopium 即ち顯微鏡といふべきを「むしめがね」とすること、同様に、Telescopium 即ち望遠鏡を寧ろ柔らかに「とほめがね」とすることは、耳に聞いただけで解りかねる日本語や、漢語萬能時代の夢よりさめて、純粹な日本語(耳で聞いただけで解る日本語)を採用するといふ意味の徹底に於いて、一般に賛成して頂けるものだと思う。現代の理學研究上に偉勳を立てつゝある顯微鏡や望遠鏡を、其等の最も幼稚な原始型である「虫めがね」や「遠めがね」の名で表象せしめることに多少の不満を感じる人士があるかも知れないが、しかし又考へ直して見ると、Microscopium や Telescopium といふ星座が此うした驚異的な器械の效績を記念するために天空に作られた時代の、其の器械其のものはヤツバリ「むしめがね」、「とほめがね」と呼ばれる程度のものであつたのであるし、原語の Microscope

や Telescope だつて、元々其れ位の意味を以つて此の世に生れ出たのであるのだから、決して自分は上記の純日本語を以つて、冒瀆とは思はない。

Sextant 星座を「六分儀」と譯し、同様に **Octant** を「八分儀」と譯するのは誠に尤もな話で、吾人も不賛成ではない。只、しかし、事實上、Sextant が何物であるかを知つてゐるやうな人たちは、多くは船乗りか、又は少くとも多少の横文字を解する人なのだから、わざわざ「六分儀」などとゴツ々々した漢字譯を用ゐないで、いきなり「セキスタント」と言つて、少しも差支へなく通用するのであるから、例へば spectrum や type を必ずしも分光帯や型式として漢字化しないでも、單にスペクトル、タイプ等で既に日本語として取り扱はれる如く、「セキスタント」のまゝでも良からうと思ふ。Octant だつて、「オクタント」で良いのだらうし、**Reticulum** も「レチクル」で良いやうに思はれる。(續く)

經度緯度觀測の要求に應ず

花山天文臺では昨年來破損してゐた天文經緯儀の水準器が新しく獨逸から到着したので再び此の優秀機が觀測界に活躍することゝなつた機會を利用し、經緯度出張觀測委員會といふものが組織された。これは近年天文知識の普及と共に各地に於て經度緯度の精密な觀測を天文學的に實行決定してもらいたいと云ふ要求があるのに對し花山天文臺では公務に差支へない限り臺員が出張して此の需に應じる企である。機械は主として上記の經緯儀が用ひられ經緯度共に 0.1 秒内外まで精確に決定される筈である。天文に興味を持つ各個人、學校、天文臺、その他研究所或は諸團體等にして其地の精密な經緯度決定を要求する方々は遠慮なく花山天文臺長に書面で申込れたい。觀測は晴夜少なくとも三夜を要し、費用は觀測者(最少限度二人)の往復旅費、滞在費その他の必要額を觀測要求者に於て支辨せられたい。〔花山急報第90號より〕